
隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会い。

Natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会い。

【Nコード】

N 8 6 3 9 L

【作者名】

N a t u

【あらすじ】

此処は東京にあるとある街。

この街は夜になるととても危険として政府から‘危険区域’として指定されていた。吸血鬼と人間とそして人間と吸血鬼のハーフであるダムピール

が暮らしていた。だが、人間は吸血鬼を恐怖の対象としそしてダムピールは畏怖の対象として見られていた。するとある日の夜。1人の青年（少年）が何かしらの事件に巻き込まれ瀕死の重体をおって

しまった。

彼の名は山崎退。彼はダムピールの中でも特殊分類に入るダムピールだった。しいて言えば・・・人間の血より吸血鬼の血の方が強くて濃いと言う事。そして・・・そんな彼の前に1人の吸血鬼が現れる。

彼の名は高杉晋助。吸血鬼の中でも特殊な純血でそして日本吸血鬼界の帝王エンペラーの男であった。そして、彼に出会った事で退の「運命は大きく、変わるのであった。」

（前書き）

此れは、短編で行く予定です。

もし機会があれば連載で書こうと思っています。

時代は現代設定です。（原作ではありませんのであくまでパロです
ので孫編もご了承の程よろしくお願い致します。）

予めお断りしますが、此れは・・・BLでございます。苦手な方は即座にお引き取り頂く事をお勧め致します。尚、一応高杉さんと山崎さんです。

ひょっとしたら、銀さん達も出てくる可能性あります。またオリキヤラも。

高杉さんが吸血鬼設定です。で・・・今の所山崎さんはダムピールって設定です。（吸血鬼の血がかなり濃いという特殊設定。尚、ダムピールの事に関しては吸血鬼と人間のハーフ位しか分かりません。で・・・此れは作者が個人的になんとなく考えたものであって正式なものではございません。其れも兼ねてご理解とご了承のほどを重ねて宜しくお願い致します。）注意書きが長くて申し訳ないです。其れでは今度こそ本編へどうぞ（笑；；）

残酷シーン等あり予定ですその辺もご理解の程よろしくお願い致します。

尚そんなに裏は無いと思われませんが・・・苦手な方は・・・ご覧にならない方が宜しいかと。

此処は、東京のとある街。

で、静かな夜だが・・・此处である事件が発生した。

そして・・・路地裏。

あたりから男共の声で「クソオオ！！！！あの半人前め！！何処に行きやがった！？」

「オイ！！奴はかなりの手覆いだ！！そんな遠くに行っていないはずだ！！さがせ！！」

「オウよ！！」そして男共は闇の中へと走りさって行った。

と同時に路地裏で壁側にもつれこむように倒れ込んだ1人の青年。

ダムピールの山崎退だ。

彼は、ほぼって言って良いほど瀕死の状態だった。

退ゴゴホと咳払いをし血を吐き出し息を切らして「・・・ハハ。こっ、こいつはヤバいな。」

‘お、俺・・・この場で死ぬのかな？あっけねエ’。

もう、少し生きていたかった。

そう呟き眼を閉じようとしただが・・・。

「ククク。オイオイ。‘こんな所でくたばっちゃうのかア’？」

と低い男の声がした。

その男は黒紫のスーツを着て黒のシャツを身にまとして靴は金色の靴を履いていた。

うすら黒がかかった紫の短髪に左目には黒の眼帯を施してある。

右目は碧色をしていた。

山崎はその声を聞きうつすらと目を開けた。

そしてうすらうすらではあるがその男を見て「・・・だ、誰？」

誰なんだ？ 一体この男は（ヒト）は。

するとその男は山崎の間にしゃがみ込み右目で山崎を見てニヤリと笑い行き成り「死にたくねェだろ？ 生きてェだろ？」

山崎はその声を聞きゆつくりながらも頷いた。

そして男はククと笑いながら山崎を抱きしめて、「俺アがお前エの願いを叶えてやるよ。」退。」

山崎は一瞬驚き男に眼をやって・・・。

な、何で俺の名を知ってんだ？この男は・・・！？

何で？？と相変わらず疑問視していた。

だが、男はそんな山崎をよそに「あア・・・まだ、自己紹介がまだだったな。俺ア高杉晋助っうもんだ。よろしくなア。」

山崎再び驚いて・・・。

な！！た、高杉って・・・。

まさかあの日本吸血鬼界の帝王エンペラーの高杉晋助！？

な・・・何で？？？

だが、疑問持ち続けている山崎をさらによそにしてニヤリと笑い耳元で「俺アがお前エを、拾ってやるよ、退。」そう囁いた次の瞬間高杉は山崎の首筋に顔うずめ下で舐めた。

そして・・・。

ブツリと高杉の牙が山崎の首筋に打たれた。

ズズズ。ズズズ。と山崎の血が高杉に吸われる音がする。

山崎心の中で・・・。

あァ・・・此れでもう、今の俺、とも、別れなんだな、。

特殊ダムピールは吸血鬼に噛み付かれると自身がダムピールから吸血鬼化するのを知っていた。

山崎はフツと気を失った。

と同時に高杉も牙を抜き手で口についた山崎の血を拭いクククと笑い山崎の髪を撫でて「・・・今日からお前エの、主、はこの俺だァ。‘一生ついてきてもらおうぜエ’？退。」そう言い山崎を抱え闇へと消えて行った。

一方、その様子を1人の男が見ていた。

銀髪の男で赤い目をしていた。名は坂田銀時。

彼も山崎と同じ特殊ダンプビルである。

実は、彼も高杉を始め他の純血等に狙われている。

黒のスーツと赤いシャツを着ていた。

銀時頭かきながら「・・・やれやれ。ある意味やベエ事になっちゃったなア。ジミーの奴が高杉につれて行かれちゃった。か。俺アも何か対策ねらねエといけねエな。」そう呟きその場を後にした。

すると入れ替わるかのように黒の短髪で全身黒づくめの男がタバコを吸いながらニヤリと笑い「やっと思つけたぜ？俺の銀時。」と呟いた。この男も高杉と同じく純血であり名を土方十四郎。高杉の知り合いでもある。と同時に銀時を何故か知らないが？とても気に入っていた。

噂では日本マフィアのボスとの噂も。。

土方クと笑い「今度こそ逃がしはしねエよ。絶対になア。」

一方、その裏では1人の女がひっそりとその様子を見ていた。

そして焦りながら「・・・オイオイ。何で‘兄貴’が此処にいのさ？日本離れていたんじゃないアなかったのかよ。」と罰惡そうに小声で言った。

その女の名は橘夏美。（彼女は人間）土方の妹分であり、幼少の頃高杉に懐いてよく可愛がられた。高杉曰く、俺の黒猫、だそうだ。何故かは知らない。（彼女の詳しい設定は基本的に銀魂連載とは変わりません。（今の所）因みに闇の始末屋炎龍の過去持ちそして、左肩と首には蝶の小さいが刺青が施されてある。

その施し主は高杉である。現在は中立派組織ワカバリリーダー兼幹部で紅のリーダー兼幹部でもある。

夏美はチラと見てその場をすばやく去った。

土方も其れに気づいたのかチラと見てククと笑い「・・・夏美か。」

まさか、あいつも此処に来ていたとはな。

高杉の奴にでも教えてやろうか。

そして土方空を見てタバコを吸いながら「・・・今夜はデケエ月が出てるな。良い夜だ。‘獲物’と序に‘俺の妹分’も見つける事が出来たんだからなア。」

俺からもそして高杉^{あいつ}からも、二度と逃げ切れると思うなよ、？夏美。

そう心の中で呟き不敵な笑みを浮かべ闇の中へと去って行った。

隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会い。完。

(後書き)

今回は此処では初のBLです。ご覧いただき有難うございました。

作者はBLにも微妙にはまっています(笑；)
書いてて楽しかったです。

予めお断りしておきますが・・・あくまでも一応高山ですので。

ご理解の程を。多分これは此れ前提で近いうちに連載する予定です。

其れでは今度こそ失礼致します。

お付き合い下さいましてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8639/>

隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会い。

2010年10月20日09時39分発行